活人活論

『いま、部落史がおもしろい』その後（2）

渡辺俊雄

新しい部落史への努力

研究者が中世だ、近世だと議論しているうちに、教育現場で「では、どう教えたらいいのだ」という思いが募ってきているのも事実だ。業を煮やした現場の先生方が、自分たちで新しい部落史像を積極的に示し始めた。住本健次さんの『たのしい同和教育への道―明日の同和教育をつくる』（キリン館、一九九六年五月）や、塩見鮮一郎・小松克己『どう超えるのか？部落差別―人権と部落観の再発見』（プロブレムQ&A16）（緑風出版、一九九六年一一月）などがそうである。住本さん、小松さんは、それぞれ高校の先生である。拙著で前近代が専門でないのに中世や近世にまで言及した私も、実は業を煮やしていた一人だった。

こうして現場の先生がみずから部落史を語り始めたのは、悪いことではない。これからは、一人ひとりが部落史を勉強し、自分が納得したこと以外は喋らない、というくらいの努力が求められるだろう。

なお、近年の前近代をめぐる論争を総括している論文に、上野茂編『被差別民の精神世界―部落史観の転換』（明石書店、一九九六年五月）に収録されている臼井寿光「部落史の枠組みと構想」があり、権力という問題を幕府・藩に限定するのではなく、天皇や公家など草の根の権威、庄屋などの位階制的中間権力、さらに社会的権力など、多面的に理解することが必要だと指摘している。また同書の「まえがき」で編者の上野さんが、従来の近世政治起源説とは「別の内実をもって、いわばひと廻りして再び権力と差別がいかなる有機関係にあるのかないのか」が問われるだろうと述べているのは、共感できる。

そのほか、部落解放研究所編『部落史の再発見』（一九九六年四月）、全国部落史研究交流会編『部落史における東西―食肉と皮革』（一九九六年六月）に収録されている諸論文も、新しい部落史像を構築するうえで参考になるだろう。地域の部落史としては、京都部落史研究所が『京都の部落史』全一〇巻を完結させているし、同研究所は『近江八幡の部落史』（一九九五年一〇月）も編集し、刊行した。大阪の部落史については、『大阪の部落史通信』で時々の議論や史料を紹介し、九号まで刊行している。

問われる歴史像

こうした折り、『部落解放』四二〇号（一九九七年四月）が〈部落史学習をどうすすめるか〉を特集し、小学校・中学校・高校の先生方が日頃の実践を紹介している。そのなかで外川正明さんが主に京都の部落史研究の成果を踏まえ、「中世の文化と被差別民―差別の社会的成立」「近世身分制と被差別民―差別の政治的制度的成立」「近代社会のなかでの差別―社会問題としての部落問題の成立」と三つのポイントを整理しているのは、きわめて常識的ではあるが要領を得ているように思う。

同じ特集で、佐久間敦史さんは「シミュレーションで教える中世の差別」の実践を報告していて、部落史学習もここまで来たかという感がする。実践が目指しているのは中世の授業だが、すべてを米作りに還元してしまうのはむしろ近世社会のイメージだろう。しかも、最後にどの身分に米俵がたくさん集積されたかという内容は、中世の職人や芸能民の世界とは縁遠いし、貧富の問題ではあっても差別を実感することとは無縁なのではないかと思う。そもそも、支配階級が農民に土地を貸し賃借料を取ったうえに最後に収穫高をすべて収奪するなどという前提＝ゲームのルールが歴史を踏まえていないし、これでは農民もまた「たくましく」生き抜いてきたという歴史を追体験することはできない。

この実践では子どもたちに「反権力の気持を持たせた」ことを良しとしている。しかしそうした一面的な歴史像、支配者は血も涙もない収奪者、農民は働いても働いても貧しかった犠牲者で、職人や芸能者は「土地を持たず、農業ができない人たち」だといった単純化された既存の社会像・民衆像、近代的な価値観で歴史を解釈することを乗り越えることこそ、いま必要なのではないだろうか。授業の形式は新しいが、歴史の内実は「超」古い。

重層性、多様性

ところで、拙著では私なりに部落史を一貫して見る視点として歴史の重層性、多様性、違いあるいは差異というキーワードを用意した。

重層性とは、従来の議論で言えば連続と非連続（断絶）のことだが、いまの私には歴史に非連続や断絶があるとは思えず、歴史は基本的に連続しているように感じられる。特に意識の面ではそうであろう。近世という社会は中世的価値観を否定していきなり登場するのではなく、とりあえずは中世以来の慣習の上に構築される。いま私たちが近世社会として思い浮べる厳しい身分制度というイメージはその後に形成された、あるいは当時の知識人が「かくあるべし」と描いた社会像であり、厳しい身分制度が近世の初頭から存在していたわけではない。そうした転換が一八世紀であることが近年主張されている（例えば、吉田栄治郎「失われた伝統と創られる伝統」部落解放研究所編『部落史の再発見』に収録）。

近世と近代の関係も、同様だろう。近世と近代を基本的に断絶している面から説明しようとする畑中敏之さんの議論（例えば『「部落史」の終わり』など）は、あまりにも時代を輪切りにしていて納得がいかない。教育現場でも、これまで起源ばかりを重視してきた部落史学習への反省から近代を重視しようという傾向が出てきているのは新しい動きだが、ここでも近代の問題を近世とはまったく切り離して取り上げる傾向が強い。これでは、中世と断絶した近世を教えてきたのと同じ誤りを犯すことになる。

例えば、部落問題が近代の問題であることを強調する時、炭鉱や軍隊の近くに明治以降にできた部落があるという例がよく取り上げられる。しかし、それまで部落ではなかった場所に部落民が住むようになってそこが部落と見なされるという事実は、近世に「かわた」身分の人が街道筋の警護や新田開発、河川の改修のために動員され、定住して「かわた」村となったことと、異なる点はない。それは、例え部落民が生まれた村を離れても部落民だというレッテルが付いて回るという差別意識の根強さ、歴史の重層性をかえって物語る事例とも理解できる。

部落差別がなぜかくも強固に存在するのか。歴史の重層性だけでなく、阿部謹也さんのいう「世間」（『「世間」とは何か』講談社現代新書、一九九五年七月）や、最近では山内昶さんの「タブー」という問題意識（『タブーの謎を解く』ちくま新書、一九九六年一二月）などを踏ま

えても、差別意識は人間の歴史と深く関わっているように思う。

いずれにせよ、これまで「部落差別はなくすことができる」という前提あるいは暗黙の了解のもとで解放運動や解放教育の戦略は立てられてきたと思うが、果たしてそうなのかを含めて、差別意識の解明が改めて求められている。

多様性という視点から部落史を見直す必要もあるだろう。これまでとくに解放運動史は「丑松」を克服すべき部落民像、水平社運動をあるべき解放運動像だという前提で議論し評価してきたが、「(仮称)水平社歴史館」建設推進委員会編『図説　水平社運動』(解放出版社、一九九六年九月)でも明らかなように、現実の水平運動は複雑である。

さらに近年、その丑松のモデルとされる大江磯吉の研究も進み(荒木謙『『破戒』のモデル―大江磯吉の生涯』解放出版社、一九九六年一二月)、優れた教育者であった足跡も明らかになってきた。そして島崎藤村の小説『破戒』の評価じたいが大きく変ろうとしている(灘本昌久「瀬川丑松、テキサスへ行かず」上・下(『こぺる』三九・四〇号、一九九六年六月・七月)。

違い・差異

違い・差異という問題について言えば、例えば小林丈広さんが「「新平民」から「特殊部落」へ」で、少なくとも京都の農村部落にあっては近代にも周囲の農村と違う風俗・習慣があったことが「特殊部落」視の根拠になっていると論じている(部落解放研究所編『部落史の再発見』に収録)。そもそも中世の被差別民(の一部)が近世の「かわた」身分となっていった事実は、これまで近世政治起源説がイメージしてきたように「違いのないところに差別をつくった」のではなく、そもそも違いがあったことを意味している。

だとすれば、これまで定説とされている、部落民には他の日本人と価値観や宗教観、言語などの違いがなく「差別されるものが部落民」だとしか規定のしようがないという議論自体が再検討されるべきだろう。

日野謙一さんの「差別的関係についての社会学的考察」(領家穣編『日本近代化と部落問題』明石書店、一九九六年二月)、野口道彦さんの「部落差別の現状認識のずれと解放の戦略」(八木正編『被差別世界と社会学』明石書店、一九九六年八月)、八木晃介さんの「部落問題の社会

学」(栗原彬編『日本社会の差別構造』弘文堂、一九九六年一二月)、いずれも基本的にその定説を越えてはいない。

この点に関して吉田智弥さんは、基本的に違いを前提にして差別を論じ、なおかつ部落と部落外の連帯を志向しようとしており、一つの議論として検討すべきではないかと思う(吉田智弥『歩きながらの反差別論―「人間に光」よみがえる日を信じて』〈自治研なら別冊〉(奈良県地方自治研究センター、一九九六年六月)。

差別はあるはずがない、のか

以上のことと関連して言えば、これまで部落解放運動や教育・啓発などの基本的な認識は、部落差別のような悪い習慣は不合理なものであり、本来あるはずがない、あるべきでない、民衆が許すはずがないものだ、ということだったように思う。だから部落史研究においても、あるはずのない部落差別が「なぜつくられた」のかという枠組みで議論してきたし、民衆が許すはずのない差別が残ってきたのは「政治」が差別するように仕向け、「権力」が差別を残してきたのだと考えてきた。中世であれ、近世であれ、政治起源説とは、そうした暗黙の了解のうえに議論されてきた。

しかし、果たして、部落差別はそのようにして「つくられ」「残されて」きたのだろうか。部落差別は、(今後もあっていいとは言うつもりはないが)少なくとも歴史的には、「あるべくして、あった」と思う。歴史で解明すべきは、それぞれの時代や社会に差別が「どう、あったのか」であって、あるはずのない部落差別が「なぜ、つくられた」のか、「誰が、残してきた」のかではないし、権力であれ民衆であれ、差別を残してきた「犯人」探し、責任追及なのではない。いま部落史研究、ひいては部落史の教育・啓発で問い直されているのは、そうした歴史の見方を含めての話である。

一人ひとりで部落史を

最後に、近年「学力」とは何かという議論のなかで、従来のような知識の詰め込みではなく、学力を「自分さがし」つまり「アイデンティティの形成」だとする考えがあると聞く(解放教育研究所編『解放教育のアイデンティティ』明治図書)。私は、部落史を研究したり学ぶ意味も基本的には同じだと思う。

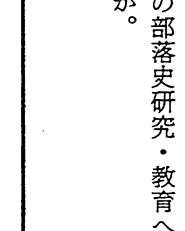
つまり部落史をどう考えるかは、それぞれの個人がこ

れまで自分が生きてきた過去をどう自覚するのか、これから部落問題・部落差別とどう向き合って生きていこうとするのかという問題と深く関係する。だから部落史をどう見るかは、結局は一人ひとりで発見するしかないのだ。私が拙著の補論で「自分と部落」史のすすめを書いた背景にも、そうした問題意識があった。

私に言わせれば、歴史的な事実を踏まえていれば（と簡単にはいかず、このこと自体が大きな論争になるのは承知しているが）、それをどう意味付けて部落史として再構成するかは、十人いれば十人とも違っていてもいい。部落史の理解は「これが決定版だ」とか「これが正しく、あれが間違い」などと提示されるべきではない。誰か部落史の権威者が「真実は、こうだ」と言い、啓発や教育の現場がみんなそれにつき従うというようなことはどこかおかしいし、これからはそんな時代ではないだろう。かく言う議論も今の私の意見であって、誰に強制するつもりもない。

時あたかも、いわゆる自由主義史観をめぐる論争とかかわって、小熊英二さんが歴史教育の制度疲労を指摘し（毎日新聞、一九九七年四月一四日）、山崎正和さんが「歴史は物語から、歴史教育は倫理教育から解放されねばならない」（朝日新聞、同年二月二七日）と述べているのは、これまでの部落史研究・教育への反省にも共通することではないか。

いま、部落史がおもしろい

（部落史の見直しとは？　本書は、新しい事実の発見、歴史の見方の変化、部落解放運動の新しい問題意識によって通説が再検討されている部落史を、時代を追って平易に解き明かす。）

解放出版社
渡辺俊雄著
四六判　二一〇頁
一、八五四円